

特集 第9回DRI防災セミナー 災害の経験を“伝える”

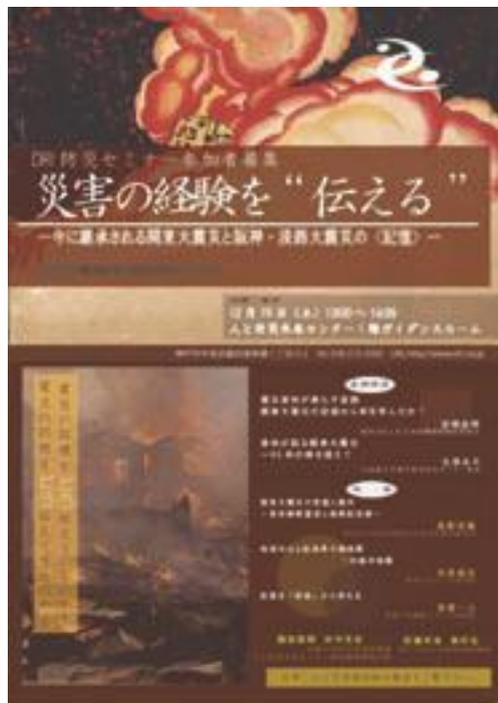


～今に継承される関東大震災と阪神・淡路大震災の〈記憶〉～

阪神・淡路大震災15周年に向けて、昨年4月から毎月行なわれてきたDRI防災セミナーの締めくくりとして、2009年12月19日に「災害の経験を“伝える”～今に継承される関東大震災と阪神・淡路大震災の〈記憶〉～」を開催しました。研究者、市民の方をはじめ約140名が参加し、被災経験を“伝える”ための方法や意義をめぐり、活発な討論がくりひろげられました。



討論の様子(司会奥村弘氏)



開催趣旨

阪神・淡路大震災の経験や教訓を後世に“伝える”ために、これまで被災地では、様々な方法による取り組みが模索されてきました。しかし、阪神・淡路大震災からまもなく15年が過ぎようとしており、記憶の風化が懸念されていることも事実です。このような状況で今後重要になっていくのが、震災の被害状況や復興過程を記録にとどめた「震災資料」です。では、「震災資料」をどのように活用すれば、大震災の記憶を埋没されることなく“伝えて”いくことができるのでしょうか。このことを考えるために、阪神・淡路大震災と関東大震災、そして直近の中越・中越沖地震の事例を比較検討し、大災害が歴史となっていくとき、「震災資料」を活用しつつ、「記憶」をどう伝えていくべきかについて焦点をあてました。

基調講演



室崎益輝氏

「震災資料が果たす役割 関東大震災の記録から何を学んだか？」

室崎益輝氏(関西学院大学災害復興制度研究所長)

関東大震災の際に寺田寅彦と中村清二が資料として残した「火災動態図」をもとに、炎の高さを判定した若い頃の研究経験が語られました。関東大震災では、幅300m、高さ30mの巨大な火柱が移動し、住民によるバケツリレーでは消火できるはずもありませんでした。しかし、その後の戦時防空計画以後、バケツリレーが神話化され、現在の防災計画にも反映されていることを危惧していると述べられました。最後に室崎氏は、阪神・淡路大震災時には、震災資料を使う側から作る側となったが、ご自身の研究経験から、50年経っても有効な資料作成の必要性を主張されました。



北原糸子氏

「資料が語る関東大震災 86年の時を超えて」

北原糸子氏(立命館大学歴史都市防災センター教授)

阪神・淡路大震災は、災害史を研究する意義を再度認識した原点だと述べられ、関東大震災に関する多様な資料を紹介されました。その上で、関東大震災後には、毎年9月1日に記念行事が行われたが、戦争と結びつくようになって行われざるを得なかったため、戦後には大々的には行われなくなってしまったことを指摘されました。このような過去の大災害である関東大震災から学び、新しいことを学ぶとするならば、震災記念日が毎年繰り返される中で、政府などに任せるのではなく、私たち自身が、生活の再建ができるような防災を考え出すことで、震災の経験を、「私たち」自身のものとする必要があるであろうと結ばれました。



高野宏康氏

○高野宏康氏(神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員)の報告

「関東大震災の慰霊と展示 東京都慰霊堂と復興記念館」では、東京都慰霊堂における調査の概要と、具体的な震災資料紹介がありました。

○矢田俊文氏(新潟大学人文学部教授)の報告

「地域文化と新潟県中越地震・中越沖地震」では、新潟での地震に対する歴史資料救出活動の様子が紹介され、日常時における取り組みが災害時に生きると主張されました。



矢田俊文氏

○笠原一人氏(京都工芸繊維大学大学院助教)の報告

「記憶を「表現」から考える」では、記憶は常に表現をとまなうことが紹介され、非体験者が主体的に震災の記憶に関われるような朗読等々の展示事例が報告されました。

小休止の後、フロアを交え奥村弘氏(神戸大学人文学研究科教授)を司会に活発な討論が行われました。討論の場では、多様な報告内容を反映して、多様な意見と当センターへの要望が飛び交いました。

- ・いかに伝えるかの前に、何を伝えるのかをもっと考えなくてはならない。
- ・災害の起こった当時の文脈で震災資料を読み解かねばならない。
- ・地域の歴史文化に位置付けて、大震災を歴史的に捉えなければならない。

災害の経験を後世に「伝えて」いくためには、今回のセミナーのような多様な意見を出し合う「場」が必要だと資料専門員は思っています。



笠原一人氏

今に継承される関東大震災の慰霊

関東大震災は、大正12年(1923年)9月1日の出来事でした。それから86年を経た今でも、9月1日に東京都慰霊堂周辺では、犠牲者への慰霊が続けられています。12月の第9回DRI防災セミナー会場では、北原糸子氏、高野宏康氏により2009年秋季慰霊大法要の概要パネルが展示されました。その一部を紹介します。



東京都慰霊堂



納骨堂



朝鮮人犠牲者追悼会



東京都仏教連合による法要



参詣者のにぎわい



慰霊堂周辺の様子

神戸大学附属図書館との合同資料展講演会

「資料が語る阪神・淡路大震災の記憶と現在」を開催

2009年11月28日、神戸大学附属図書館と人と防災未来センターとの共催で昨年10月から今年1月まで開催している合同資料展「資料が語る阪神・淡路大震災の記憶と現在」の一環として、講演会が人と防災未来センターにて開催されました。

講演1：岩崎信彦氏

「過去を受け止め、未来に生きる一震災資料の収集・保存の意義を考えながら」

講演2：佐々木和子氏

「震災資料が生まれる一震災資料収集・保存の現場から」



岩崎信彦氏



佐々木和子氏



当日の様子

講師を務めたのは、岩崎信彦(神戸大学名誉教授)氏と、佐々木和子(神戸大学地域連携推進室研究員)氏の両氏です。震災から15年が経過しようとしている中で、記憶の共有やその継承という、社会的にも関心が高いテーマであったこともあり、集まった約50人の参加者も熱心に耳を傾けていました。

岩崎氏は、「震災障害者」問題への取組みを通して、被災地における震災体験の共有や継承という活動自体が地域社会の歴史を形作っていることを指摘し、また、資料を有効に活用することで、震災を実際には体験していない人々に対してもその経験を伝えることができると話しました。

また佐々木氏は、資料収集の実際を詳細に説明した後、資料は、実際の体験を越えて「未来に向けての郵便物」となりうるとして、資料収集と、その保全活用の重要性を訴えました。

講演後も、フロアからの質問を受けて活発な議論が行われました。

新着資料紹介

ニューヨークの高校から贈られた励ましのキルト

西宮市在住の中原健吉氏からの資料提供がありました。中原氏は震災当時、摩耶兵庫高校で英語教師をしていました。震災直前の年末年始、中原氏はニューヨークのブロンクスにあるF.L.A.G.S高校に古い友人のギャレット先生を訪ね、日本の正月文化などについて現地の生徒に教えました。

帰国して間もなく震災に遭い、中原氏とご両親は大きな被害を受けました。中原氏はご両親の看病をしながら、摩耶兵庫高校の避難所運営にあられるなどしていましたが、そんな最中に中原氏のところへF.L.A.G.S高校から励ましのキルトが贈られてきました。このキルトは同高校のアートの先生であるアベル先生が作成したもので、生徒と教職員が書いた励ましのメッセージや寄せ書きが縫いつけられています。中原氏はこのキルトを摩耶兵庫高校の英語教室にかざり、生徒たちは英語でお礼の手紙を出しました。しかし、2008年にアベル先生は亡くなりました。中原氏はこのキルトをアベル先生のご遺族へ返そうとも考えたそうですが、「神戸の人たちを勇気づけるもの」として神戸の地で大切に保管していただきたいと思います、今回寄贈くださいました。



裏面の寄せ書き



キルト(表)

刊行されなかった手記集

震災当時、西宮市にお住まいだった小島のぶ江氏、神戸市東灘区にお住まいだった木村淳子氏より資料の提供がありました。小島氏・木村氏は、震災当時唐詩を勉強するサークルに参加しており、震災を受けてサークルのメンバーに呼びかけ、その体験談を冊子にしようとなさっていました。相当数のメンバーから原稿は集まったものの、震災によって県外への移動を余儀なくされた人も多くいたり、また、ほとんどの人の生活が激変したりしたこともあって、冊子は作成されませんでした。今回寄贈頂いた資料は、このとき両氏のお手元に集められたものです。

手記原稿には、震災直後の緊迫した生活や、やりとり、心情などが吐露されています。震災の影響の軽重は、個々人さまざまですが、その中で暮らした人々の困惑や、精神的・肉体的疲労や不慣れた生活などを知る上で大変貴重な資料と言えます。

「ぼうさいみらい子ども文庫」がオープンしました

震災の経験と教訓を次代を担う子どもたちに伝えるため、国際ソロプチミスト神戸より、「ぼうさいみらい子ども文庫」が資料室内に寄贈され、1月9日(土)に贈呈式が行われました。



グリーンを基調とした落ち着いた雰囲気の子どもの文庫からは、窓の外に広がる六甲の山々が見渡せます。ここでは子どもたちが気軽にくつろぎながら震災資料等にふれあえる場です。

震災や防災に関する絵本、カルタ、ビデオ、防災体験ゲーム等、子どもの年齢にあわせて楽しめるようになっています。無料で利用できますので気軽にお立ち寄りください。



レポート

『僕の震災日記』～市民が撮影・制作した震災記録映像～



末岡健司氏

1935年(昭和10年)神戸市生まれ。多摩美術大学絵画科卒業。イラスト制作や音楽のライブ録音・制作を続けてきたが、クモ膜下出血を発症し引退。その後、生まれ育った神戸市東灘区魚崎で立ち並ぶ酒蔵や人々をビデオ撮影し始めた矢先、1995年1月17日に阪神・淡路大震災を体験。その惨状をカメラに収めた。

末岡氏は、自身の撮影した映像の合間に自作の絵コンテを入れて、撮影できなかったシーンを補いながら作品を丹念に作りあげられています。末岡氏の人物描写の温かさには、人柄がにじみ出ています。

末岡健司氏のコメント

人はそれぞれの人生の中でさまざまな体験をするが、あの大地震が襲ったとき、あまりの凄まじさに「自分の人生もうじき終わりになる」というあきらめをハッキリ自覚した。この恐怖感を超えた諦観、こんな感覚は初めてのことだった。そこで私はこの体験をもとに『僕の震災日記』を作った。

被災地に残された震災資料を大切に保存し、このような市民の自主的な活動を支援し、紹介していくことも資料室の大切な仕事です。市民による活動が、地域の《災害文化》の構築につながっていくことを資料専門員は願っています。



▲『僕の震災日記』原画(上・下)



※『僕の震災日記』は資料室の映像コーナーで公開しています。ぜひお立ち寄りください。

(財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
阪神・淡路大震災記念

人と防災未来センター 資料室(西館5階)

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
TEL.078-262-5058 FAX.078-262-5062

HPアドレス <http://www.dri.ne.jp>

開室時間 9:30~17:30

閉室日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日) 12月29日から1月3日

資料室は無料で
ご利用いただけます